

趣旨

概ね2035年を展望する中・長期的な視点に立って、今後5年間における本県の生涯学習、社会教育振興の基本的な方向性についての提言

現状認識

より不確実で正解のない時代（VUCA）

- テクノロジーの進化、災害の頻発・激甚化、新型感染症の脅威など、変化が激しく先の見通せない時代に
- 地域社会では、急速な人口の減少などにより地域の担い手が不足し活力が低下したり、コロナ禍の影響により人と人とのつながりが希薄化するなど、簡単には解決策を見出すことができない様々な課題が顕在化

人生100年時代、3ステージからマルチステージの人生へ

- 人生100年時代、教育→仕事→引退の3ステージから、複数の仕事や役割を経験するマルチステージへの移行が可能に
- マルチステージの人生を実現させていく意志と能力を、一人ひとりが身に付けていく必要がある
- 学校教育を修了した後も引き続き学び続ける人と、学びを止めてしまう人の二極化が懸念される

誰一人取り残されることのない社会の実現

- 障がい、性的マイノリティ、ジェンダー、国籍、経済状況、家庭環境などにより困難な状況にある人も、誰一人として取り残されることのない社会の実現が求められている

基本理念 すべての人がつながり、学び合い、共に変わり続ける“シン・生涯学習社会”へ

真 生涯をかけて自己変容し続ける「真」の生涯学習へ

- 大人は「学び終えた人」ではない
- だれもがマルチステージの人生を実現させていく意思と能力を、生涯にわたって持ち続け、それぞれが思い描く幸せに向かって自己変容していくことができる
- 学びによって、だれもがWell-beingを実感できる長野県を目指す

「生涯学習者」の育成

- 子ども達の好奇心や感性を刺激し、探究的な学びにつながる環境づくり

働く世代、子育て世代の学び直し、つながりづくり

- リカレント教育・リスキリングの推進
- 学びほぐし、共創のためのサードプレイス（第3の居場所）づくり
- 子育て世代の居場所づくり

シニア世代の多様な学びの推進

- 年齢や心身の状態にかかわらず学び合える場の充実

新 いつでも、どこでも、だれとでも。最新のテクノロジーを活用した「新」しい学びの推進

- 最新のテクノロジーを最大限活用
- 年齢によらず「いつでも」学べる
- 場所の制約なく「どこでも」学べる
- 「だれとでも」つながり、学び合える
- 学びへの希望が高まり、日本一学びやすく、学んだ成果を活かせる長野県へ

学びの新しい基盤整備

- 図書館、公民館、博物館等の社会教育施設におけるデジタル基盤や連携を強化（サービスのデジタル化、資料のデジタルアーカイブ）
- オンライン学習の活用推進
- デジタル技術を活用したバリアフリー推進

デジタル・ディバイドの解消

- 社会教育施設等での情報リテラシー向上のための学習機会の提供
- 多世代によるデジタルツールの学び合いの場づくり

信 学び合いから「信」頼を紡ぐ。一人ひとりが生きる持続可能な地域社会へ

- 「答えのない問い」に対して、地域の特性に応じた「自分たちの答え」を探究していく
- 対話を繰り返しながらつながり、知恵を持ち寄り、信頼を紡いでいく
- 支える、支えられるという関係を越えて、みんなが主役に
- 誰一人取り残されることのない、持続可能な地域社会を創っていく

社会的包摂の推進

- 障がいの生涯学習の推進
- 国籍、経済状況、孤立・孤独等、様々な事情で学びの機会に恵まれていない人、困難を抱える若者等への学習機会の提供

多様性を活かした地域コミュニティづくり

- 世代、職業、個性が混ざり合い、誰もが仲間づくり、地域づくりができる公民館活動の推進
- 公民館等の社会教育施設で、地域住民に寄り添いコミュニティの課題解決力を引き出すコーディネーターの育成と連携
- 学校と地域、家庭が互いに成長するスクール・コミュニティの推進

施策の方向性

これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた提言

すべての人がつながり、学び合い、共に変わり続ける

“シン・生涯学習社会”へ

令和4年10月

長野県生涯学習審議会

目 次

1 提言の趣旨	3
2 現状認識	3
3 基本理念	5
3-1 生涯をかけて自己変容し続ける「真」の生涯学習へ	5
3-2 いつでも、どこでも、だれとでも。最新のテクノロジーを活用した 「新」しい学びの推進	5
3-3 学び合いから「信」頼を紡ぐ。一人ひとりが生きる持続可能な地域社会へ	6
4 施策の方向性	7
4-1 「真」の生涯学習	7
4-2 「新」しい学びの推進	8
4-3 学び合いから「信」頼を紡ぐ	9
5 資料	11
5-1 審議経過	11
5-2 生涯学習審議会委員名簿	12

1 提言の趣旨

長野県では、平成 30 年度から令和 4 年度までを計画期間とする「第 3 次長野県教育振興基本計画」に基づいて教育行政が推進されており、生涯学習・社会教育分野に関しても、「誰もが、生涯、学び合い、学び続け、自らの人生と自分たちの社会を創造できる環境をつくります。」との基本目標を掲げ、様々な施策が展開されているところである。

令和 4 年度末の計画期間満了を控え、本審議会は、計画期間中に生じた社会環境の変化等を考慮しつつ、次期計画を念頭に、概ね 2035 年を展望する中・長期的な視点に立って、今後 5 年間における本県の生涯学習、社会教育振興の基本的な方向性についての提言をまとめた。

2 現状認識

○ より不確実で正解のない時代（VUCA）

AI、IoT、ロボットに代表されるテクノロジーの急激な進化や、地球温暖化に起因するとされる災害の頻発・激甚化、新型コロナウイルスをはじめとする新型感染症への脅威の高まりなど、現代社会は変化が激しく先の見通せない時代にある。

また、地域社会においては、急速な人口の減少などにより地域の担い手が不足し活力が低下したり、コロナ禍の影響により人と人とのつながりが希薄化し地域コミュニティの衰退が懸念されるなど、簡単には解決策を見出すことができない様々な課題が顕在化しつつある。

○ 人生 100 年時代、3 ステージからマルチステージの人生へ

我が国の平均寿命は延伸が続き、人生 100 年時代到来への備えの必要性が叫ばれている。これからの時代においては、これまで当たり前であった教育→仕事→引退の 3 ステージの人生から、複数の仕事や役割を経験するマルチステージへの人生へと移行していくことが可能となる。

誰もが長い人生をいきいきと過ごしていくためには、マルチステージの人生を実現させていく意志と能力を、一人ひとりが生涯にわたり身に付けていく必要があるが、学校教育を修了した後も引き続き学び続ける人と、学びを止めてしまう人の二極化が懸念される。とりわけ長寿県とされる本県におい

ては、県民一人ひとりが生涯を通じて学び続けていくことは大切である。

○ 誰一人取り残されることのない社会の実現

経済状況や成育環境などに起因する様々な格差の拡大や、一人ひとりの異なる背景を理由とした社会の分断の進行等が懸念される。

また、本県では世界を相手としたグローバル企業の立地が盛んであり、多くの外国籍住民も県内各地で生活を営んでいるなど、地域内における人と人とのつながりの多様性がますます広がっている。

障がい、性的マイノリティ、ジェンダー、国籍、経済状況、家庭環境などにかかわらず、互いに多様性や違いを認め合い、等しくその存在と役割を認められ、何度でも自らの可能性に挑戦できる、誰一人として取り残されることのない社会の実現が求められている。

3 基本理念

前述の現状認識のもと、これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた基本理念として、以下を掲げる。

すべての人がつながり、学び合い、共に変わり続ける

“シン・生涯学習社会”へ

➤ 「つながり、学び合い、共に変わり続ける」

変化が激しく、不確実で、正解のない時代を生きていくためには、県民一人ひとりが多様な他者と互いにつながり、学び合い、影響し合いながら、それぞれが思い描く幸せに向かって自分自身を変え続けていくこと（自己変容）が必要である。

➤ 「シン・生涯学習社会」

これからの生涯学習の方向性を「真」の生涯学習、「新」しい生涯学習、「信」頼を紡ぐ生涯学習、の3つ視点で捉えなおす。

「新」しい技術の活用と、人と人との「信」頼関係を深めることで、一人ひとりが生涯学び続け、変わり続ける「真」の生涯学習社会を実現する。

3-1 生涯をかけて自己変容し続ける「真」の生涯学習へ

大人は「学び終えた人」ではない。人生が学びに満ち、だれもがマルチステージの人生を実現させていく意思と能力を、生涯にわたり持ち続け、それぞれが思い描く幸せに向かって、自己変容していくことができる。そして学びによって Well-being を実感できる長野県を目指す。

3-2 いつでも、どこでも、だれとでも。

最新のテクノロジーを活用した「新」しい学びの推進

最新のテクノロジーを最大限活用しながら、年齢によらず「いつでも」学び始めることができる。場所の制約を受けずに、「どこでも」学べる。

そして「だれとでも」つながり、多様な個性が混ざり合う中で学び合うことができる。学びへの希望が高まり、日本一学びやすく、学んだ成果を活かせる長野県を目指す。

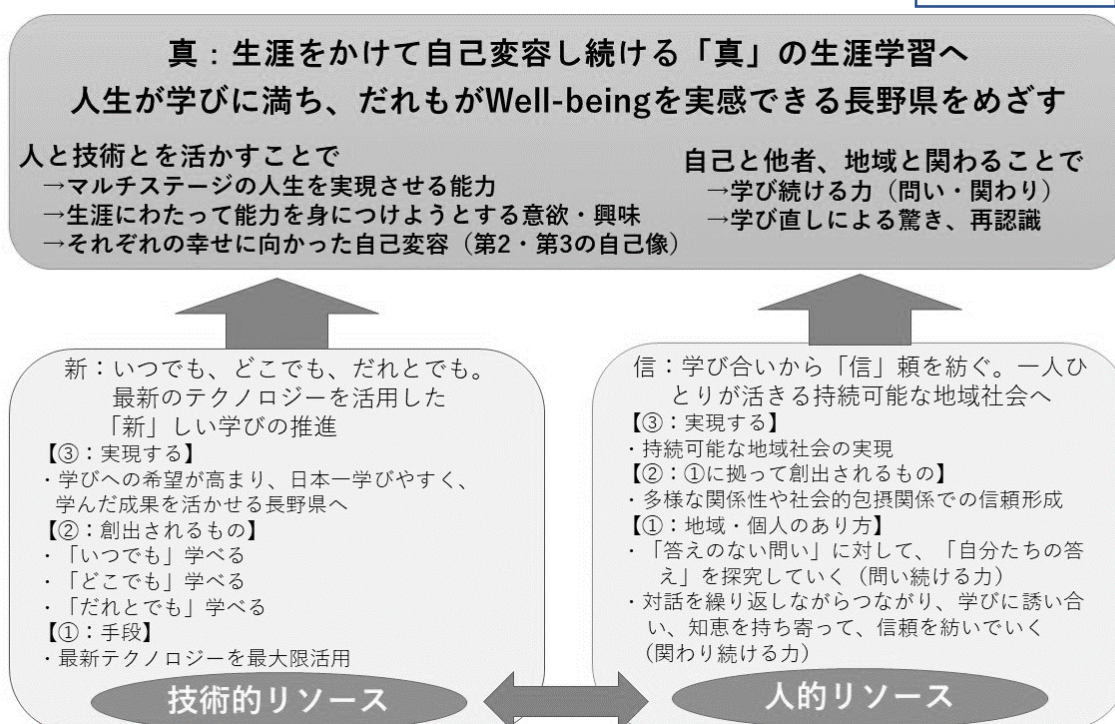
3-3 学び合いから「信」頼を紡ぐ。

一人ひとりが生きる持続可能な地域社会へ

災害への備えや人口減少など、地域社会は解決策が簡単に見いだせない課題であふれている。「答えのない問い」に対して、それぞれの地域の特性に応じた「自分たちの答え」を探究していく。

そこに住む多様な立場や世代の人々が、対話を繰り返しながらつながり、学びに誘い合い、知恵を持ち寄って、信頼を紡いでいく。共に学び合う中で、支える支えられるという関係を越えて、みんなが主役の地域づくりを進める。そして、誰一人取り残されることのない、持続可能な地域社会を創っていく。

イメージ図



4 施策の方向性

「真」、「新」、「信」の3つの視点に基づき、それぞれの施策展開の方向性と特に力を入れていくべき取組を以下のとおり例示する。

4-1 「真」の生涯学習

① 「生涯学習者」の育成

生涯を通じて学び続ける「生涯学習者」になるためには、自ら問いを立て、課題解決に必要な情報を集め、仲間と協働しながら答えを見出していく探究的な学びを、比較的若い年齢のうちから実践していることが大切である。

社会教育の分野においても、探究的な学びの機会を多くの県民が得られる環境を整えていく必要がある。

- 子ども達の好奇心や感性を刺激し、探究的な学びにつながる環境づくり
- 一人ひとりが社会に関わり身近な課題を探究することによって、生涯にわたって学び続けられる環境を整備

② 働く世代、子育て世代等の学び直し、つながりづくり

変化の激しい時代においては、すでに学校教育を修了している働く世代も学びから遠ざかることなく、新しい知識や技能を身に付けていくことが必要である。働きながらも学ぶことができる環境や、日ごろ交流することのない人同士の交流から、それまでの仕事で身に付けてきた知識や技能をアンラーンし(学びほぐし)、新たな視点や発想を得られるよう、必要な環境を整備することが必要である。

また、子育て中心で、周囲とのつながりが薄れたり、学ぶ余裕のない人々にとって、他者とのつながり、共に学び合える場づくりが必要である。

- リカレント教育・リスクリング等の学び直しの推進
- 学びほぐし、共創のためのサードプレイス(第3の居場所)づくり
- 子育て世代の居場所づくり

③ シニア世代の多様な学びの推進

人生100年時代においては、シニア世代も生涯にわたり社会と関わり、参画し続けることが重要である。学んだことを社会の課題解決に役立てながら、他者とながら続けられる場づくりが必要である。

- 年齢や心身の状態にかかわらず学び合える場の充実
- シニア世代が身近な社会課題とつながるための公民館等による中間支援の充実

4-2 「新」しい学びの推進

① デジタル技術を活用した学びの新しい基盤整備

デジタル技術を最大限活用することにより、場所や時間の制約にとらわれずに、いつでも、どこでも学びにアクセスでき、これまでつながり合う機会がなかった人同士がつながり、共に学び合うことがこれまで以上に可能となる。

地域の学びの拠点である社会教育施設のデジタル基盤を強化するとともに、歴史資料や文化財を、デジタル技術を用いて保存・蓄積し、容易に活用できるデジタルアーカイブの充実を進めていく必要がある。

さらに、場所や時間を選ばないオンライン学習の活用も生涯学習の推進に有効である。

- 図書館、公民館、博物館等の社会教育施設におけるデジタル基盤や連携を強化（サービスのデジタル化、資料のデジタルアーカイブ）
- オンライン学習の活用推進
- デジタル技術を活用したバリアフリーの推進

② デジタル・デバイドの解消

インターネットやパソコン、スマートフォン等の通信技術（ICT）の進展は目覚ましいものがあるが、その恩恵を受けられる人と受けられない人に生まれる情報格差（デジタル・デバイド）は、だれもが生涯学び続ける社会を構築していく上で解消すべき課題である。

また、あらゆる情報が満ち溢れる現代社会においては、情報を正しく取捨選択・解釈し、適切に活用できる能力（情報リテラシー）を一人ひとりが身に付けられるよう、学習の機会を提供していく必要がある。

例えば、デジタルに苦手意識のあるシニア世代に対しては、若者世代

が教える側にまわるなどの、多世代によるデジタルツール（スマホ、パソコン等）の学び合いを行うことも有効である。

- 社会教育施設等での情報リテラシー向上のための学習機会の提供
- 多世代によるデジタルツールの学び合いの場づくり

4-3 学び合いから「信」頼を紡ぐ

① 社会的包摂の推進

高齢者、障がい者、外国籍住民、厳しい経済的事情に置かれている人、教育機会が十分でない若者、孤立・孤独に悩む人など、様々な事情により困難な状況に置かれている人も、誰一人として取り残されることのない社会的包摂の実現に向けて、学習の機会を確保していく必要がある。

本県では「障がいのある人もない人も共に生きる長野県づくり条例」が令和4年に施行され、障がいのある人の自立及び社会参加に向けた取組等に関する施策を推進していくとされており、障がい者の生涯を通じた学習機会の確保は一層重要な課題として取り組んでいく必要がある。

- 障がい者の生涯学習の推進
- 国籍、経済状況、孤立・孤独等、様々な事情で学びの機会に恵まれていない人、困難を抱える若者等への学習機会の提供
- 社会教育分野と福祉分野の連携

② 多様性を活かした地域コミュニティづくり

急激な人口減少による地域の担い手の不足など、簡単には解決できない課題にあふれる地域社会においては、異なる背景を持つ多様な人同士が共に知恵を出し合い、対話を繰り返して学び合い、それぞれの地域特性に応じた解決策を見出していくことが求められる。

そのためにも、多様な世代や職業、個性が混ざり合い、人や地域を学べる機会が必要である。

加えて、地域の課題に向き合う住民に寄り添い、コミュニティの課題解決力を引き出すコーディネーターの育成と連携、活躍の仕組みづくりが欠かせない。

さらに、学校、地域、家庭が連携することで、それぞれが共に成長できるコミュニティをつくることも必要である。

- 世代、職業、個性が混ざり合い、誰もが仲間づくり、地域づくりができる公民館活動の推進
- 公民館等の社会教育施設で、地域住民に寄り添いコミュニティの課題解決力を引き出すコーディネーターの育成と連携
- 社会教育主事、社会教育士の養成や配置の促進
- 学校と地域、家庭が互いに成長するスクール・コミュニティ（学校を核とした地域づくり）の推進

5 資料

5-1 審議経過

回	日時	場所	主な審議内容
第1回	令和3年9月7日	オンライン開催	生涯学習に係る現状と課題について意見交換
第2回	令和4年2月4日	オンライン開催	生涯学習の振興についてグループ討議
第3回	令和4年6月9日	県立長野図書館	「これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた提言」骨子（案）について意見交換
第4回	令和4年9月6日	県立長野図書館	「これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた提言」のとりまとめについて意見交換

5-2 生涯学習審議会委員名簿

(委員：五十音順、敬称略)

氏 名	役 職 等
あきば よしえ 秋葉 芳江	公立大学法人長野県立大学 ソーシャル・イノベーション創出センター長
いずみやま りな 泉山 莉奈	大学生
いとう みちこ 伊藤美知子	元長野県PTA連合会 副会長
こいけ れいこ 小池 玲子	長野県社会教育委員連絡協議会 会長
せき まさひろ 関 正浩	長野県白馬高等学校 校長
ちの たいせい 千野 泰聖	北海道中標津町立計根別学園 教員
ながみね なつき 長峰 夏樹	長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター 所長
にし かずお 西 一夫	国立大学法人信州大学 教育学部 教授 (副学部長)
ひぐち まさゆき 樋口 正幸	合同会社 小滝プラス 代表社員
ふかの かよこ 深野香代子	KOA株式会社 顧問
ほりうち きぬよ 堀内 絹予	上田市立神科小学校 校長
まつだ あきひろ 松田 晶弘	ボランティア従事
めんじょう よしたか 毛受 芳高	一般社団法人アスバシ 代表理事
もりた まい 森田 舞	ゆめサポママ@ながの 共同代表
やなぎさわ れいこ 柳澤 礼子	佐久市中央公民館 館長